夏目漱石

(二)

夏目漱石

(二)

新潮社版

日本文学全集 6

夏目漱石（二）

発行／1967年9月15日　十一刷／1969年10月25日
発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71
電話東京(260)1111(大代)　振替東京808　郵便番号162
印刷所／株式会社・金羊社　製本所／神田加藤製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社　製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan　1967

目次

三四郎　五
それから　一九七
道草　三九九
注解　五八一
解説　伊藤整　五九一

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

夏目漱石

（二）

三四郎

一

うとうととして眼が覚めると女は何時の間にか、隣の爺さんと話を始めている。此爺さんは慥かに前の前の駅から乗った田舎者である。発車間際に頓狂な声を出して、馳け込んで来て、いきなり肌を抜いだと思ったら脊中に御灸の痕が一杯あったので、三四郎の記憶に残っている。爺さんが汗を拭いて、肌を入れて、女の隣りに腰を懸けた迄よく注意して見ていた位である。

女とは京都からの相乗である。乗った時から三四郎の眼に着いた。第一色が黒い。三四郎は九州から山陽線に移って、段々京大阪へ近付いてくるうちに、女の色が次第に白くなるので何時の間にか故郷を遠退く様な憐れを感じていた。それで此女が車室に這入って来た時は、何となく異性の味方を得た心持がした。此女の色は実際九州色であった。

三輪田の御光さんと同じ色である。国を立つ間際迄は、御光さんは、うるさい女であった。傍を離れるのが大いに難有かった。けれども、斯うして見ると、御光さんの様なのも決して悪くはない。

唯顔立から云うと、此女の方が余程上等である。口の締りがある。眼が判明している。額が御光さんの様にだだっ広くない。何となく好い心持に出来上っている。それで三四郎は五分に一度位は眼を上げて女の方を見ていた。時々は女と自分の眼が行き中る事もあった。爺さんが女の隣へ腰を掛けた時などは、尤も注意して、出来る丈長い間、女の様子を見ていた。其時女はにこりと笑って、さあ御掛けと云って爺さんに席を譲っていた。夫からしばらくして、三四郎は眠くなって寐て仕舞ったのである。

其寐ている間に女と爺さんは懇意になって話を始めたものと見える。眼を開けた三四郎は黙って二人の話を聞いて居た。女はこんな事を云う。——

小供の玩具は矢張広島より京都の方が安くって善いものがある。京都で一寸用があって下りた序に、蛸薬師の傍で玩具を買って来た。久し振で国へ帰って小供に逢うのは嬉しい。然し夫の仕送りが途切れて、仕方なしに親の里へ帰るのだから心配だ。夫は呉に居て長らく海軍の職工をして居たが戦争中は旅順の方に行っていた。戦争が済んでから一旦帰って来た。間もなくあっちの方が金が儲かると云って、又大連へ出稼に行った。始めのうちは音信もあり、月々のものも几帳面と送って来たから好かったが、此半歳許前から手紙も金も丸で来なくなって仕舞った。不実な性質ではないから、大丈夫だけれども、何時迄も遊んで食べている訳には行かないので、安否のわかる迄は仕方がないから、里へ帰って待っている積だ。

爺さんは蛸薬師も知らず、玩具にも興味がないと見えて、始めのうちは只はいはいと返事丈していたが、旅順以後急に同情を催して、それは大いに気の毒だと云い出した。自分の子も戦争中兵隊にとられて、とうとう彼地で死んで仕舞った。一体戦争は何の為にするものだか解らない。後で景気でも好くなればだが、大事な子は殺される、物価は高くなる。こんな馬鹿気たものはない。世の好い時分に出稼ぎなどと云うものはなかった。みんな戦争の御蔭だ。何しろ信心が大切だ。生きて働いて居るに違ない。もう少し待っていれば屹度帰って来る。——爺さんはこんな事を云って、頻りに女を慰めて居た。やがて汽車が留ったら、では御大事にと、女に挨拶をして元気よく出て行った。

爺さんに続いて下りたものが四人程あったが、入れ易って、乗ったのはたった一人しかない。固から込み合った客車でもなかったのが、急に淋しくなった。日の暮れた所為かも知れない。駅夫が屋根をどしどし踏んで、上から灯の点いた洋燈を挿し込んで行く。三四郎は思い出した様に前の停車場で買った弁当を食い出した。

車が動き出して二分も立ったろうと思う頃例の女はすうと立って三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行った。此時女の帯の色が始めて三四郎の眼に這入った。三四郎は鮎の煮浸しの頭を咿えた儘女の後姿を見送っていた。便所に行ったんだなと思いながら頻りに食っている。

女はやがて帰って来た。今度は正面が見えた。三四郎の弁当はもう仕舞掛である。下を向いて一生懸命に箸を突ッ込んで二口三口頑張ったが、女は、どうもまだ元の席へ帰らないらしい。もしやと思って、ひょいと眼を挙げて見ると矢張正面に立っていた。然し三四郎が眼を挙げると同時に女は動き出した。只三四郎の横を通って、自分の座へ帰るべき所を、すぐと前へ来て、身体を横へ向けて、窓から首を出して、静に外を眺め出した。風が強くあたって、鬢がふわふわする所が三四郎の眼に這入った。此時三四郎は空になった弁当の折を力一杯に窓から放り出した。女の窓と三四郎の窓は一軒置の隣であった。風に逆らって抛げた折の蓋が白く舞戻った様に見えた時、三四郎は飛んだ事をしたのかと気が付いて、不途女の顔を見た。顔は生憎列車の外に出ていた。けれども女は静かに首を引っ込めて更紗の手帛で額の所を丁寧に拭き始めた。三四郎は兎も角も謝まる方が安全だと考えた。

「御免なさい」と云った。

女は「いいえ」と答えた。まだ顔を拭いている。三四郎は仕方なしに黙って仕舞った。女も黙って仕舞った。そうして又首を窓から出した。三四人の乗客は暗い洋燈の下で、みんな寐ぼけた顔をしている。口を利いているものは誰もない。汽車丈が凄じい音を立てて行く。三四郎は眼を眠った。

しばらくすると「名古屋はもう直でしょうか」と云う女の声がした。見ると何時の間にか向き直って、及び腰になって、顔を三四郎の傍迄持って来ている。三四郎は驚いた。

「そうですね」と云ったが、始めて東京へ行くんだから一向要領を得ない。

「此分では後れますでしょうか」

「後れるでしょう」

「あんたも名古屋へ御下で……」

「はあ、下ります」

此汽車は名古屋留りであった。会話は頗る平凡であった。只女が三四郎の筋向うに腰を掛けた許りである。それで、しばらくの間は又汽車の音丈になって仕舞う。

次の駅で汽車が留まった時、女は漸く三四郎に名古屋へ着いたら迷惑でも宿屋へ案内して呉れと云いだし

た。一人では気味が悪いからと云って、頻りに頼む。三四郎も尤もだと思った。けれども、そう快く引き受ける気にもならなかった。何しろ知らない女なんだから、頗る躊躇したにはしたが、断然断る勇気も出なかったので、まあ好い加減な生返事をして居た。其うち汽車は名古屋へ着いた。

大きな行李は新橋迄預けてあるから心配はない。三四郎は手頃なズックの革鞄と傘丈持って改札場を出た。頭には高等学校の夏帽を被っている。然し卒業したしるしに徽章丈は捥ぎ取って仕舞った。昼間見ると其処丈色が新しい。後から女が尾いて来る。三四郎は此帽子に対して少々極りが悪かった。けれども尾いて来るのだから仕方がない。女の方では、此帽子を無論ただの汚ない帽子と思っている。

九時半に着くべき汽車が四十分程後れたのだから、もう十時は過っている。けれども暑い時分だから町はまだ宵の口の様に賑やかだ。宿屋も眼の前に二三軒ある。ただ三四郎にはちと立派過ぎる様に思われた。そこで電気燈の点いている三階作りの前を澄して通り越して、ぶらぶら歩行いて行った。無論不案内の土地だから何処へ出るか分らない。只暗い方へ行った。女は何とも云わずに尾いて来る。すると比較的淋しい横町の角から二軒目に御宿と云う看板が見えた。之は三四郎にも女にも相応な汚ない看板であった。三四郎は鳥渡振返って、一口女にどうですと相談したが、女は結構だというんで、思い切ってずっと這入った。上り口で二人連ではないと断る筈の所を、入らっしゃい、——どうぞ御上り——御案内——梅の四番抔とのべつに喋舌られたので、已を得ず無言の儘二人共梅の四番へ通されて仕舞った。

下女が茶を持ってくる間二人はぼんやり向い合って坐っていた。下女が茶を持って来て、御風呂をと云った時は、もう此婦人は自分の連ではないと断る丈の勇気が出なかった。そこで手拭をぶら下げて、御先へと挨拶をして、風呂場へ出て行った。風呂場は廊下の突き当りで便所の隣にあった。薄暗くって、大分不潔の様である。三四郎は着物を脱いで、風呂桶の中へ飛び込んで、少し考えた。こいつは厄介だとじゃぶじゃぶ遣っていると、廊下に足音がする。誰か便所へ這入った様子である。やがて出て来た。手を洗う。それが済

试读结束：需要全本请在线购买： www.eri

んだら、ぎいと風呂場の戸を半分開けた。例の女が入口から、「ちいと流しましょうか」と聞いた。三四郎は大きな声で、

「いえ沢山です」と断った。然し女は出て行かない。却って這入って来た。そうして帯を解き出した。三四郎と一所に湯を使う気と見える。別に恥かしい様子も見えない。三四郎は忽ち湯槽を飛び出した。そこそこに身体を拭いて座敷へ帰って、座蒲団の上に坐って、少からず驚いていると、下女が宿帳を持って来た。

三四郎は宿帳を取り上げて、福岡県京都郡真崎村小川三四郎二十三年学生と正直に書いたが、女の所へ行って全く困って仕舞った。湯から出る迄待って居れば好かったと思ったが、仕方がない。下女がちゃんと控えている。已を得ず同県同郡同村同姓花二十三年と出鱈目を書いて渡した。そうして頻りに団扇を使っていた。

やがて女は帰って来た。「どうも、失礼致しました」と云っている。三四郎は「いいや」と答えた。

三四郎は革鞄の中から帳面を取り出して日記をつけ出した。書く事も何もない。女がいなければ書く事が沢山ある様に思われた。すると女は「一寸出て参ります」と云って部屋を出て行った。三四郎は益々日記が書けなくなった。何処へ行ったんだろうと考え出した。

そこへ下女が床を延べに来る。広い蒲団を一枚しか持って来ないから、床は二つ敷かなくては不可ないと云うと、部屋が狭いとか、蚊帳が狭いとか云って埒が明かない。面倒がる様にも見える。仕舞には只今番頭が一寸出ましたから、帰ったら聞いて持って参りましょうと云って、頑固に一枚の蒲団を蚊帳一杯に敷いて出て行った。

夫から、しばらくすると女が帰って来た。どうも遅くなりましてと云う。蚊帳の影で何かしているうちに、がらんがらんという音がした。小供に見舞の玩具が鳴ったに違ない。女はやがて風呂敷包を元の通りに結んだと見える。蚊帳の向うで「御先へ」と云う声がした。三四郎はただ「はあ」と答えた儘で、敷居に尻を乗せて、団扇を使っていた。いっそ此儘で夜を明かして仕舞おうかとも思った。けれども蚊がぶんぶん来る。外ではとても凌ぎ切れない。三四郎はついと立っ

て、革鞄の中から、キャラコの襯衣と洋袴下を出して、それを素肌へ着けて、其上から紺の兵児帯を締めた。それから西洋手拭を二筋持った儘蚊帳の中へ這入った。女は蒲団の向の隅でまだ団扇を動かしている。

「失礼ですが、私は疳性で他人の蒲団に寝るのが嫌だから……少し蚤除の工夫を遣るから御免なさい」

三四郎はこんな事を云って、あらかじめ、敷いてある敷布の余っている端を女の寝ている方へ向けてぐるぐる捲き出した。そうして蒲団の真中に白い長い仕切を拵えた。女は向へ寝返りを打った。三四郎は西洋手拭を広げて、これを自分の領分に二枚続きに長く敷いて、其上に細長く寝た。其晩は三四郎の手も足も此幅の狭い西洋手拭の外には一寸も出なかった。女とは一言も口を利かなかった。女も壁を向いた儘凝として動かなかった。

夜はようよう明けた。顔を洗って膳に向った時、女はにこりと笑って、「昨夜は蚤は出ませんでしたか」と聞いた。三四郎は「ええ、難有う、御蔭さまで」と云う様な事を真面目に答えながら、下を向いて、御猪口の葡萄豆をしきりに突つき出した。

勘定をして宿を出て、停車場へ着いた時、女は始めて関西線で四日市の方へ行くのだと云う事を三四郎に話した。三四郎の汽車は間もなく来た。時間の都合で女は少し待合わせる事となった。改札場の際迄送って来た女は、

「色々御厄介になりまして、……では御機嫌よう」と丁寧に御辞儀をした。三四郎は革鞄と傘を片手に持った儘、空いた手で例の古帽子を取って、只一言、

「左様なら」と云った。女は其顔を凝と眺めていた、が、やがて落付いた調子で、

「あなたは余っ程度胸のない方ですね」と云って、にやりと笑った。三四郎はプラット・フォームの上へ弾き出された様な心持がした。車の中へ這入ったら両方の耳が一層熱り出した。しばらくは凝っと小さくなっていた。やがて車掌の鳴らす口笛が長い列車の果から果迄響き渡った。列車は動き出す。三四郎はそっと窓から首を出した。女はとくの昔に何処かへ行って仕舞った。大きな時計ばかりが眼に着いた。三四郎は又そっと自分の席に帰った。乗合は大分居る。けれども三四郎の挙動に注意する様なものは一人もない。只筋向

うに坐った男が自分の席に帰る三四郎を一寸見た。

三四郎は此男に見られた時、何となく極りが悪かった。本でも読んで気を紛らかそうと思って、革鞄を開けて見ると、昨夜の西洋手拭が、上の所にぎっしり詰っている。そいつを傍へ掻き寄せて、底の方から、手に障った奴を何でも構わず引出すと、読んでも解らない*ベーコンの論文集が出た。ベーコンには気の毒な位薄っぺらな粗末な仮綴である。元来汽車の中で読む了見もないものを、大きな行李に入れ損なったから、片付ける序に提革鞄の底へ、外の二三冊と一所に放り込んで置いたのが、運悪く当選したのである。三四郎はベーコンの二十三頁を開いた。他の本でも読めそうにはない。ましてベーコン抔は無論読む気にならない。けれども三四郎は恭しく二十三頁を開いて、万遍なく頁全体を見廻していた。三四郎は二十三頁の前で一応昨夜の御浚をする気である。

元来あの女は何だろう。あんな女が世の中に居るものだろうか。女と云うものは、ああ落付いて平気でいられるものだろうか。無教育なのだろうか、大胆なのだろうか。それとも無邪気なのだろうか。要するに行ける所迄行って見なかったから、見当が付かない。思い切ってもう少し行って見ると可かった。けれども恐ろしい。別れ際にあなたは度胸のない方だと云われた時には、喫驚した。二十三年の弱点が一度に露見した様な心持であった。親でもああ旨く言い中てるものではない。……

三四郎は此処迄来て、更に悄然て仕舞った。何処の馬の骨だか分らないものに、頭の上がらない位打された様な気がした。ベーコンの二十三頁に対しても甚だ申訳がない位に感じた。

どうも、ああ狼狽しちゃ駄目だ。学問も大学生もあったものじゃない。甚だ人格に関係してくる。もう少しは仕様があったろう。けれども相手が何時でもああ出るとすると、教育を受けた自分には、あれより外に受け様がないとも思われる。すると無暗に女に近付いてはならないと云う訳になる。何だか意気地がない。非常に窮屈だ。丸で不具にでも生れたようなものである。けれども……

三四郎は急に気を易えて、別の世界の事を思出した。——是から東京に行く。大学に這入る。有名な学

者に接触する。趣味品性の具った学生と交際する。図書館で研究をする。著作をやる。世間で喝采する。母が嬉しがる。と云う様な未来をだらしなく考えて、大に元気を回復して見ると、別に二十三頁の中に顔を埋めている必要がなくなった。そこでひょいと頭を上げた。すると筋向うにいたさっきの男がまた三四郎の方を見ていた。今度は三四郎の方でも此男を見返した。

髭を濃く生している。面長の瘠ぎすの、どことなく神主じみた男であった。ただ鼻筋が真直に通っている所丈が西洋らしい。学校教育を受けつつある三四郎は、こんな男を見ると屹度教師にして仕舞う。男は白地の絣の下に、丁重に白い襦袢を重ねて、紺足袋を穿いていた。此服装から推して、三四郎は先方を中学校の教師と鑑定した。大きな未来を控えている自分から見ると、何だか下らなく感ぜられる。男はもう四十だろう。是より先もう発展しそうにもない。

男はしきりに煙草をふかしている。長い烟を鼻の穴から吹き出して、腕組をした所は大変悠長に見える。そうかと思うと無暗に便所か何かに立つ。立つ時にうんと伸をする事がある。さも退屈そうである。隣に乗合せた人が、新聞の読み殻を傍に置くのに借りて看る気も出さない。三四郎は自ら妙になって、ベーコンの論文集を伏せて仕舞った。外の小説でも出して、本気に読んで見様とも考えたが面倒だから、已めにした。それよりは前にいる人の新聞を借りたくなった。生憎前の人はぐうぐう寝ている。三四郎は手を延ばして新聞に手を掛けながら、わざと「御明きですか」と髭のある男に聞いた。男は平気な顔で「明いてるでしょう。御読みなさい」と云った。新聞を手に取った三四郎の方は却って平気でなかった。

開けて見ると新聞には別に見る程の事も載っていない。一二分で通読して仕舞った。律義に畳んで元の場所へ返しながら、一寸会釈すると、向でも軽く挨拶をして、

「君は高等学校の生徒ですか」と聞いた。

三四郎は、被っている古帽子の徽章の痕が、此男の眼に映ったのを嬉しく感じた。

「ええ」と答えた。

「東京の？」と聞返した時、始めて、

「いえ、熊本です。……然し……」と云ったなり黙って仕舞った。大学生だと云いたかったけれども、云う程の必要がないからと思って遠慮した。相手も「はあ、そう」と云ったなり煙草を吹かしている。何故熊本の生徒が今頃東京へ行くんだとも何とも聞いて呉れない。熊本の生徒には興味がないらしい。此時三四郎の前に寐ていた男が「うん、成程」と云った。それでいて横に寐ている。独言でも何でもない。髭のある人は三四郎を見てにやにやと笑った。三四郎はそれを機会に、

「あなたは何方へ」と聞いた。

「東京」とゆっくり云った限である。何だか中学校の先生らしく無くなって来た。けれども三等へ乗っている位だから大したものでない事は明らかである。三四郎はそれで談話を切り上げた。髭のある男は腕組をした儘、時々下駄の前歯で、拍子を取って、床を鳴らしたりしている。余程退屈に見える。然し此男の退屈は話したがらない退屈である。

汽車が豊橋へ着いた時、寐ていた男がむっくり起きて眼を擦りながら下りて行った。よくあんなに都合よく眼を覚ます事が出来るものだと思った。ことによると寐ぼけて停車場を間違えたんだろうと気遣ながら、窓から眺めていると、決してそうでない。無事に改札場を通過して、正気の人間の様に出て行った。三四郎は安心して席を向う側へ移した。是で髭のある人と隣り合せになった。髭のある人は入れ換って、窓から首を出して、水蜜桃を買っている。

やがて二人の間に果物を置いて、

「食べませんか」と云った。

三四郎は礼を云って、一つ食べた。髭のある人は好きと見えて、無暗に食べた。三四郎にもっと食べろと云う。三四郎は又一つ食べた。二人が水蜜桃を食べているうちに大分親密になって色々な話を始めた。

其男の説によると、桃は果物のうちで一番仙人めいている。何だか馬鹿見た様な味がする。第一核子の恰好が無器用だ。且つ穴だらけで大変面白く出来上っていると云う。三四郎は始めて聞く説だが、随分詰らない事を云う人だと思った。

次に其男がこんな事を云い出した。子規は果物が大変好きだった。且ついくらでも食える男だった。ある

時大きな樽柿を十六食った事がある。それで何ともなかった。自分抔は到底子規の真似は出来ない。――三四郎は笑って聞いていた。けれども子規の話丈には興味がある様な気がした。もう少し子規の事でも話そうかと思っていると、

「どうも好なものには自然と手が出るものでね。仕方がない。豚抔は手が出ない代りに鼻が出る。豚をね、縛って動けない様にして置いて、其鼻の先へ、御馳走を並べて置くと、動けないものだから、鼻の先が段々延びて来るそうだ。御馳走に届く迄は延びるそうです。どうも一念程恐ろしいものはない」と云って、にやにや笑っている。直面目だか冗談だか、判然と区別しにくい様な話し方である。

「まあ御互に豚でなくって仕合せだ。そう欲しいものの方へ無暗に鼻が延びて行ったら、今頃は汽車にも乗れない位長くなって困るに違ない」

三四郎は吹き出した。けれども相手は存外静かである。

「実際危険い。*レオナルド・ダ・ヴィンチと云う人は桃の幹に砒石を注射してね、其実へも毒が回るものだろうか、どうだろうかと云う試験をした事がある。所が其桃を食って死んだ人がある。危険い。気を付けないと危険い」と云いながら、散々食い散らした水蜜桃の核子やら皮やらを、一纏めに新聞に包んで、窓の外へ抛げ出した。

今度は三四郎も笑う気が起らなかった。レオナルド・ダ・ヴィンチと云う名を聞いて少しく辟易した上に、何だか昨夕の女の事を考え出して、妙に不愉快になったから、謹んで黙って仕舞った。けれども相手はそんな事に一向気が付かないらしい。やがて、

「東京は何処へ」と聞き出した。

「実は始めてで様子が善く分らんのですが……差し当り国の寄宿舎へでも行こうかと思っています」と云う。

「じゃ熊本はもう……」

「今度卒業したのです」

「はあ、そりゃ」と云ったが御目出たいとも結構だとも付けなかった。ただ「すると是から大学へ這入るのですね」と如何にも平凡であるかの如くに聞いた。

三四郎は聊か物足りなかった。其代り、

试读结束：需要全本请在线购买： www.eri